

「私の世界」

作◎長堀博士

1.

登場人物

三上夕 (OL) □

甲斐大 (役者) □

時…現代。

場所…状況に応じて変化。

○はごまかす

(三上夕(29)。一人芝居。動作に反映させられることは可能な限りの動作を交えて。)

夕「……わざと、買い忘れたわけではない。そもそもわざわざ買わなくても大抵どこかで…、よく行く美容室とか銀行とか近所の親戚の伯母さんとかから、貰えているものなのだ。でも毎年、気に入ったデザインを探してハンズかロフトへ足を伸ばす。でも今年は…、

(仕事が忙しい夕の日常の動作。「ちょっとこれ、発注ミスなんじゃないの!?!」みたいな台詞が入っても良い。)

「私の世界」

タ「…仕事が忙しくて余裕がなかったんだ。日々せかせか働いていた。体調もどうも良くない。だからたまの休みはどこにも出掛けず家で、ゴロゴロ過した。せかせか、ゴロゴロ。せかせか、ゴロゴロ……」

(せかせかとゴロゴロを繰り返して、ゴロゴロで眠りにつくように止まる…)

タ「はっと気がついたら年末で、「今年」という物語の三百六十五話目つまり、最終話になっていた。

急いで簡単な大掃除を…、簡単だと大掃除とは呼ばないだろうけどとにかく、掃除を済ませて年末年始の冷蔵庫を充実させるためにスーパーに買い物に出掛ける。家に帰ってテレビをつけたら紅白が始まった。前半戦は蕎麦を茹でながら。

後半戦はその蕎麦をつまみにビールを片手に…ふと去年の今頃はあの男と一緒にだったなあ、などと思い出す。眉間にしわ。別れて思い出すのは悪いエピソードばかり、という男だったが、『まあ孤独ではなかったなあ』などと気弱になったり、ならなかったり…。回想。

(回想。過去の男とのエピソード。男、登場。甲斐大(29)。テレビから漏れ聞こえてくる、例えば紅白なノイズ。

男「タ」

タ「ん？」

男「初詣行くぞ」

タ「えっ、今から？」

「私の世界」

男「そう」

タ「どうしたの急に」

男「厄払い厄払い、早いほうがいいだろう」

タ「そんな慌てなくても」

男「たこ焼き食べたくなっただし」

タ「えっ？ 本当は露店目当て？」

男「それもある。焼きそばも食べたいかな。年越し蕎麦」

タ「ねえ、役者はね、役が付かないって言って厄払い（役払

い）しちゃいけないんだってよ」

男「えっ！ いやいや、どうせロクな役なんて付いてないじ

ゃ俺

タ「自分で言っつ？ ーもう遅いよ眠いよ寒いよ疲れるよお

（甘える）

男「三重苦だな」（無視）

タ「明日改めて行こうよ。着物着て行きたい」

男「俺は今行きたいの」

タ「あのね、本当は夜の〇時以降は神様しか神社に行っちゃ

行けない時間帯なんだよ。実は畏れ多いことなの」

男「じゃあ俺は今から神になる」

タ「はあ？」

男「それなら畏れ多くねーべ？」

タ「その発言が畏れ多いって……」

（男、近くにあったものをけっ飛ばす。）

タ「…ちよ、ものにあたららない！」

男「偶然だね……」

タ「ため息（あーもう、本当は今から行くへのっのっ）」

男「行くの」

タ「行くのかあ…」

男「あーあ、別に無理して付き合わなくたっていいよいいよ。メールすりゃあ付いてくる女の一人や二人、すぐ見つかんだし」

タ「えっ！ 何それっー！」

男「だって事実だもん。誰にしよっかなあ……」

(男、携帯開きながら、退場。)

タ(空想の銃を打ち)「バーン。死ね」

(回想終わり。)

タ「回想サイテー。まあね、わたしやね、前向きだけが取り柄ですよ。うん。つまらない過去は忘れて今を考えよう。うん。うん！ はっと気がついたらテレビにはどこかの厳肅な、神聖な、ある意味閑散とした寺院が映し出されてた。そして初めて気がつく。あっ、来年の新しいカレンダー買い忘れたなあ、って… よっこいしょっと。

(カレンダーの前を想定して観客席に正対して立つ。縦の長方形。)

「私の世界」

タ「古い、今年のカレンダーを外すために南東に面してる壁の前に立った。知らない外国の画家が書いた「絵」のカレンダー。一発で気に入って昨年末に購入したもの。絵のタチは全然違っけど、迷路やパスルばかりをモチーフにし

ているところはエッセイヤーを彷彿とさせる。12月は出口のない迷路の中を1人の紳士が彷徨っている。1年間ありがとう。

そう思って手を伸ばして、
あれっ？

ちよっと違和感を感じる。な、何だろうっ？ テレビからは鐘の音が聞こえ始めた。ゴーン。ゴーン。年が開けたのだ。おめでとう。

何が？

私はカレンダーを持ったまま固まっている。

ゴーン。ゴーン。「12月」のページをゆっくるとゆっくっていく。

ゴーン。ゴーン。

そこに現れたのは、「13月」と書かれた今年の続き。

ゴーン。ゴッ、

……シーン。

突然テレビがブラックアウトして部屋は奇妙な静寂に包まれる。

私は予期せぬ今年の三百六十六話目に今この瞬間、突入していたのでした」

(暗転。ドーンという衝撃音と共に)「2009年13月」
の文字。(

○次の日

(目を覚ます夕。)

夕「そして翌日、風近く、遅く起きて一番最初に、あー昨日の夜は変な夢を見たな、と思う。

でもそれは一瞬でまずは、ポストに年賀状を取りに行く、が…、

あれ？

まだ来てない。今年は配達が遅いなあと思いながら朝風呂に入り、さっぱりとした気分で初詣に行く準備を始めた。着物は着ない。面倒くさい。

って言うか化粧だってかなり簡単に。だってどうせ一人だ。家を出る時にもう一度ポストを見るがまだ年賀状は届いてない。

でもきつと帰る頃までには来てるに違いない。そう思いながら歩いて近所の神社へと出掛ける「

(歩く夕。街並み。)

夕「……私には帰る田舎がない。両親が次々と他界して父親が残した若干の借金を清算したら／家も、何もかも綺麗サッパリなくなった。

私の両親のこの世の中への『何も残さなな』にはちょっと感心する。

娘だけ、

つまり私だけだ。これで私が結婚したら三上という家系は完全に消える。

ま、結婚の予定なんて全然ないけど……」

(急に立ち止まる夕。不穏な音楽が入るかも。辺りをきょろきょろと見、慌てたように右に左に駆け込む。)

走り回る夕。探し、そして走る。

とても小さな声で「誰か……」と。

「誰か」「誰か」「誰か」……

声はだんだん大きくなり、「誰か」「誰か」「誰か」

「誰か」「誰か」「誰かっ……」

夕「ああ、その時頭の中で考えていたのは昨日、夢で見た「1

3月」のカレンダーのデザイン。

夢ではなかつたこと……

1人の少女が巨大な砂時計の、くびれの部分の下の階にいる。砂時計の上の階には街が形作られているが下の、階には何も無い。

ただの砂丘だ。

砂丘。

砂の丘。

きつと少女は間違ってた下の階に落ちてしまったのだろうか少女の、表情はどこか淋しそう。

家の外に出てみて異変に気がついた。じわじわと不安と恐怖が広がる。街には私以外の人間がまったく存在しない。

誰もいない。誰も。

どこを探しても、

どこまで探しても誰の姿も、

声一つ聞こえない「すべて、

思い至る変な、とても変な考え。

みんなは2020年1月の時間にちゃんと年を越せたのには私は、越せなかった。
私だけを残してみんなは2019年から2020年へと年を越してしまっただけ、私だけを2019年、13月に、残したままで……」

(夕、駆け回る。)

そして、誰かの部屋の前に来て、ドアを叩く。「あのう……」「あのう……」「あのう……」

夕「…あのう、勝手に、入ります」

(ドアを開けて入る。誰もいない部屋。落胆……と、そこ回想の時の過去の男が現れる……)

男「よ、どうしたんだ？ 突然」

夕「えっ？」

男「久しぶりだな？」

夕「いた！」

男「なんだよ、それ」

夕「いた。なんでいるの？」

男「はっ？」

夕「うん、いて良かった。あんたなんかでも、」

男「なんかかってなんだよ、なんかかって……」

夕「ごめん、あの……、それが、大変なの」

男「大変？」

夕「うん。あの、みんな、この世の中に、誰もいなくて、初詣に出掛けようとして街に出たら、あ、私とあなた以外……」

男「落ち着けよ、落ち着けて、な、意味わかんねーよ」
 タ「ごめん。あの、整理すると…」

男「自分だけが違う世界に来てしまった」
 タ「えっ?」

男「世界って言うか、時間かな、この場合。世界中から人間が消えた。それはみんなが普通の時間のシールの上に乗っていて普通に流れて行ったのになぜか、自分だけがそこから落っこちた。『あー!』ってな具合?」

タ「何で知ってるの?」

男「知ってる?」

タ「だって、そんな冷静に、今の状況…」

男「知ってるわけじゃない。今考えられる一つの解釈じゃないか」

タ「そ、そっただけよ、あの、実はこれにはカレンダーが関係していると思うの」

男「カレンダー?」

タ「うん。私の2019年のカレンダーには「13月」のページがあったの。前からあったわけじゃない。急に出てきたって言うか、他の人にはないでしょ?」

たぶん、みんなは2020年の1月の世界に普通に年越ししたんだけど、私だけ、2019年の13月に残されて…」

男「私だけ?」

タ「あ、ごめん、私とあなた」

男(笑)「ふっ、あははは、じゃなせ俺は2020年に行けなかったんだ?」

タ「えっ?」

男「俺はそんなカレンダーなんて持ってないだろ?」

タ「カレンダーは?」

男「ねーよそんなもん。」

タ「じゃ、それは、どうして?」

男「タ、なあタ、あんたもうは知ってるよ、その答えを。

知ってるって言つか分ってる。

『自分だけが』って確率も決して高くないけど『自分と、昔の男だけが』ってそんな都合の良い確率が、絶望的に低いってこと。」

タ「えっ? 何言ってるの? 意味が…」

男「落ち着けよ。落ち着け」

タ「私、落ち着いてるよ」

男「いいや」

タ「落ち着いて、…な、ない?」

男「分ってるだろ?」

タ「何が! えっ! 私が、落ち、着いたらー!」

男「ああ。そういうことだ」

(男、退場。)

タ、すく「男を逃して…」

タ「ちよ、べにに、ちよと待ってよ。そういうひびいて何が、あれ? あの、ヒヒ? ねえ? ……」

(タ、突然、頭痛がするかのよう激しく頭を抱える…)

タ「……ま、ぼろし? うそ、私、自分で幻想を…?」

(タ、急に吐き気をまよおして、口を押さえつけて退場のはず。暗転。)

○別の日

夕「つまりあの時の私は、あの時の私は、あまりの孤独に最初は、幻想を抱くほど動揺したってこと。

私の想像力はなぜかあんな男を作り出した。

一瞬自分が壊れたってこと。

あまりにも予期しない自分の、心の働き…」

(照明。)

夕「その後、丹念に街を歩いてみたがやはり、誰もおらず、自分の置かれている状況が強固になっていく。

最悪だ。

自分の部屋で見つけたカレンダーには「13月」「14月」「15月」とページが続いている。

最悪だ。

タマネギをむくみたいにページをめくればめぐるほど次の月が出てきそうでは、すぐにやめようとした。

しばらくして最初の頃の違和感は去った。

勝手にコンビニやスーパーから物を食べたり飲んだり。

だって貨幣経済は存在しないんだ。社会というものは二人以上いて初めて成立することに気づかされる。ここには社会が存在しない。全裸で街を歩いても大丈夫。でも寒いかやららない。むしろ洋服屋から勝手に好きな服を拝借する。でも心をかすめる若干の罪悪感。

違和感？

そして自由に振る舞う分だけ孤独を自覚させられる。

再び、今度は非常に静かにゆっくると、とても重畳のある

動揺が心を支配してゆくの分かる。
分っていても自分の力では堰き止められないのはまるで、
子供頃よく見た悪夢とまるでおんなじだ」

○別の日

(暗転。ドーンという衝撃音と共に)「2009年14月」
の文字。

倒れるように横になっている夕。足下には様々な種類の
カップ麺の山。

幻想の中の過去の男、またも見えてくる。雨音。(

男「…よー、息も絶え絶えだなあ」

夕「ちゃんと食べてるわ。インスタントかしトルトだけだね」

男「自分を構成してるのは身体だけじゃないぜ。精神が死に

そっだって言ってるんだ」

夕「そう。」「忠告どうもありがと」

男「ほう。素直だな」

夕「所詮あなたは私の作り出した幻想。って言うか、つまり

私自身だもの」

男「まあそっだな」

夕「どうしてあなたなのかしら。もっと他に、親友の由佳や

江里子だっていいはずなのに」

男「親友の由佳や江里子は親友じゃなかったってことだろう？

一緒にいることが多かっただけの／ただの、遊び友達」

夕「そんなこと。けっこう何でも話してきたのに」

男「当たり前障りのならいじりばっか」

タ「そんなことない。と思うけど、例えそうだったとしても、なぜあなた？ あなたに比べたら他のどんな人だっていいくらいなの？」

男「ひどいな」

タ「事実だもん」

男「どうして俺、か、本当に分らない？」

タ「えっ？ ええ」

男「セックスしたからだよ」

タ「えっ？」

男「セックス。寝た男だから。それが理由」

タ「まさか。そんなことで…」

男「そんなこと？ 何言ってるんだよ？ タにとっては重要な事じゃないか。だろ？」

タ「私、別に…」

男「タはどうせ誰も信じることが出来ない人間だろ？」

心っていうものを信じてないからね。

他人に対して常に冷めていて誰にも、

自分の心を開いたことがない。由佳や江里子にもね。

親が早くに死んで当り前の愛情ってやつを受け損なった

からかな？ ま、そんなことはどうでもいいか。

でも肌と肌を合わせた直接的な感覚、ぬくもり、快感、そ

ういったことは自分の価値観を少し変えていった。

そういうことをしている時だけ、安心に似た安堵感を感じ

ることが出来た。

『ああ自分は、世界にたった独りじゃない。自分は生きていてもいいんだ』そんな感じかな」

タ「そんな、知った風なこと…」

男「さっき俺を自分自身と言ったくせに」

(タ、足下のカップ麺の山をけっ飛ばす。)

男「ものにあたらない！ 最低だな、タ」

(そして、時間経過、雨音が大きくなって突然消え。)

男「なあ、2020年に普通に年を越せた連中、…もう一つの世界ってヤツがどうなってるか興味わかねーか？」
タ「えっ？」

男「タが消えて消息が不明だ。どこに消えたか見当も付かない。心当たりは隈無く探して。でも見つからない、もう一つの現実」

タ「別に、帰る方法が分らない世界の事なんて…」

男「興味がないと」

タ「考えても仕方がないって思う」

男「んー、女一人消えたからって何も起こっていないように変わらず、進んでいく世界の事なんて」

タ「そうね、少し淋しいけど仕方がない」

男「ふーん。じゃあこいついのはどつだ？ 2020年の世界にもちゃんとタは存在する。ここにいる自分は枝分かれして分裂したもう一人の自分で、あっちの世界では何の問題もなくもう一人の、タがちゃんと生活している」

タ「わ、私が、もう一人？」

男「って言うか、そう言う場合、オリジナルは向こうだな。どっちかって言えばお前のがコピーってわけ」

タ「そんな、馬鹿な話…」

男「そっかなあ？ 世界だけが枝分かれして二つに分裂した

ってか？ お前だって同じようになったって不思議はないだろう？」

夕「じゃあ、」

男「ああ。帰る方法も何も、帰る場所なんてもつないんだよ

私には」

夕「……」

男「どうだい？ いいアイデアだろ？」

ちよっとは興味が湧いたか？

ああ、あと一個、別のアイデアもあるんだが…

そもそも世界には最初から、夕1人しか存在しなかった。

つまり2019年までの世界、生活、記憶はすべて後から、

夕の脳が作り出した幻想に過ぎない！」

夕「それは、そんなことはあり得ない」

男「どうして？（自分を指さしながら）こうして幻想の話し

相手を作り出す夕が、幻想の過去を作り出したって不思議

はないだろ？」

幻想の世界。

幻想の歴史。

たった1人の孤独から物語を作り出すなんて、誰にでもよ

くあることじゃねーか、なあ？」

夕「だって、そんなこと…、じゃあ私は誰から生れたの？」

親は？ 赤ちゃんの頃から1人で生きてなんか…

それに言葉や習慣や、経験、知識…

そんなのオカシイ。だって、だったらあなたはそもそも

誰？ そんなこと絶対に！ 絶対にあり得ない！」

男「おっ、食いつきいいな。ふーん、そんなに恐ろしいか。

孤独が。どうせ戻れなくっても過去がそんなに大切か？

どうせ他人を信じてこなかった人生でもそんなに、頭ん中の記憶が大切か？」

タ「大切っていうか…」

男「認めろよ！ だろ？ だったら考えろ。何か、少しでも発展的なこと。前向きだけが取り柄だったんじゃないのか？ 考えろ！ 考えるんだ！」

タ「何を？」

男「何でも。どんなことでも。とにかく考えろ。思考だけが存在だ。それが俺からの最後の言葉だ」

タ「最後の…？」

男「なあ、もうそろそろ正気に戻る時間だろ？」

タ「そんな、勝手に」

男「勝手じゃない。俺はお前だ。そもそも俺がこんなこというキャラか？ これは今自分で決めたことだ」

タ「そんな自覚 私には…」

男「タ！ …死ぬよ。」

このままでと。

精神から身体に毒がまわって本当に人生の最終回になる。まるでフェードアウトするみたいにつまらなく、ただただ死んでいく。

なあ考えろ。思考。とにかく何か考えるんだ。何でもいい。そこからやっと本当の、この物語が始まるんだ」

タ「本当の、物語…？」

○タイトル

(ドーンという衝撃音と共に「20019年15月」の文字。それが消え、水に映るように「ゆめゆめ」と、『私の世界』のタイトル文字。)

○旅立ち

(清々しい音楽。大きなバックパックを背負ったタが出てくる。そして一度振り返り…)

タ「行ってきます。ここにいると駄目になりそうだから、考える代わりにまず、動くことにした。

探す。誰か。もしくは何か。分からないけど、でも旅に出るよ。

ここではないどこかへ。

ここではないどこかへ。

ここではない…、あしがひひ

(タ、決意の握りこぶし。そして旅立つ。)

○道

(ドーンという衝撃音と共に「20019年16月」の文字。

「私の世界」の旅をしているタ。映像、音楽の中で表現。)

(ドーンという衝撃音と共に「20019年17月」の文字。

「私の世界」の旅をしているタ。映像、音楽の中で表現。)

(どこまで行っても誰もいない街。
溶暗していく世界。)

2.

登場人物

三上タ(旅人) □

おじいちゃん □

○川

(川の音が聞こえる。激流。川は大きく容易には渡ることが出来そうもない。

タ、やってきて立ち止まる。)

タ「何で、こんなところ…?」

(カバンから地図を取り出し、確認する。)

タ「どこにいるのよ…? 同じ世界じゃないってこと?」 川なん

てこんなところじゃ、「…」

(タ、川の上流、下流と見回すが…)

(と、一人の人間、初老の男が登場。)

夕「……、ま、そっね」

初老「そうか。ならば少しモデルをやっていかないか？ 絵を描きながら話そう。わしも風景画ばかりで飽きていた頃だ」

夕「まるで実在するような物言い」

初老「その方がいいだろう？ さ、そこに立って。さ、ポーズを決めてくれ」

夕「まだモデルをやるなんて言っていないんですけど」

初老「いいからいいから、ポーズポーズ」

夕「えっ……！ 無理無理、普通に立ってるからそれで勘弁して」

初老「つまらん女だなあ」

(絵を描いていく初老。)

初老「……でだ、これからどうするね」

夕「どうするって……それ私に聞くん？ 分かっていたらおじいちゃんになんか会わないわよ」

初老「ん。そうかあ……でだ、これからどうするね」

夕「それボケ？ もう死んだくせにボケまで始まったっ」

初老「何を言う、ボケておるのは夕、お前の方じゃ……
どうするね……』『これからどうする』『それはお前さんに
どうって大問題じゃ……』」

夕「そなたに言うってせ」

初老「どうして行く」

夕「どうして……、特に決まってるわけじゃない……」

初老「この川はどうするねえっ」

夕「そっねの……、そなたにこの川なんてなかったと聞くん

「だけど」

初老「邪魔な川じゃのー」

タ「そー！」

初老「実はそろそろわしも、この川の向こうに帰りたいと思
うてな」

タ「帰る？ この川ってもしかして三途の川？」

初老「馬鹿。せっかく生き返ったのに簡単に殺さないでぢや
タ「じゃあ帰るって、川の向こうには何があるの？」

初老「街」

タ「街！」

初老「があるといいなあってな」

タ「えっ？ あるの？ ないの？ どっち？」

初老「それはタ、お前次第じゃないんかあ？」

タ「私、次第？」

初老「川を渡りたいなあ、おじいちゃん」

タ「渡ればいいでしょ？ 橋か何か探して」

初老「今のところないんじや」

タ「ないって？」

初老「だから橋。ないの、なあタ、何とかしてくれんかなあ？」

タ「私？ えっ？ 作るの？ 無理無理、どう考えても無理」

初老「作り方教えるから」

タ「教えるって、えっー私図工のよ。？。鳥の巣箱作る授業
で鳥が入る穴あけ忘れてただの箱になった私の、工作能力
では絶対無理！」

初老「別に大工仕事しろなんて言っていないじゃろー！ 想像の
話し相手作る力あるんならわしを、向こうへ運び橋くら
い何とかならんかなあって言っておるんじや」

タ「えっ、想像、の橋？ でも想像した橋なんて」

初老「渡れんか？ そっか？ でも思い出しついで。

昔本で読んで知っておるじゃろ、この世の中のすべては元々、自分にとっては何もかんもが自分の脳が作り出した幻想に過ぎないのじゃなかったか？

私たちは直接モノを触ることは出来ない。すべては一瞬神経、脳を通過した揚句に勝手に作りだした幻想の触覚に過ぎない。直接、

モノを見ることは出来ない。すべては、

脳が勝手に認識したと思ひ込んだ幻想。直接、

何も聞くことなんて出来ない。鼓膜の、

振動から脳が認識する間には思いもよらないバイアスが

かかって 現実と、

認識が一致することはない。嗅覚も、

味覚も、どんな痛みや快感や直接感じたと思つたすべてが、

最初からある意味脳が作り出した幻想にすぎないとタ、

お前は知っておったじゃろ。

そしてそんな脳の中の機能が実際こうして、想像の話し相手を生み出している。

はてさて川に橋を掛けることくらい簡単なことじゃないかな？

タ「でも」

初老「でもっ」

タ「でもいわは、自分のメンタルローレをさっつてるわけじゃない。勝手に自分の心がさっつてるだけ」

初老「じゃったらそのコントロールを練習したらいい。
まず最初に川に橋を掛ける。

そして橋がかかったら向こう岸には、街！」
夕「街？」

初老「そこには人の営みがある」

夕「営み！ そんなの無理だっ！」

初老「そっか？ 確かに、最初から全部は無理じゃあろうって、
でもまずは橋を掛ける。その橋はここで生きるお前さんの、
新しい第一歩になるんじゃないかなあ？」

夕「第一歩？」

初老「もう気付いておるのじゃあ？ じつまで行ってもど
んなに遠くまで歩いてても例え、地球の裏側にだってここ
には、自分以外誰もいないってことよ」

夕「！」

初老「私の世界」

夕「……わた、しの……」

初老「まず橋を掛ける。橋の向こうには街。そして人の営み
……」

夕「そんなの、そんなこと、幾ら何でも……」

初老「アダムがイブを自分の身体から作りだしそこから、

人間の歴史が始まったように夕、

お前が自分の身体からこの世界、

すべてを作り出すんじゃ

夕「大きい大きい。大きすぎるってー」

初老「でも！ もうこうなったらやるしかないんじゃない
のかな？ まずは橋を掛ける。橋を掛ける！ すべてはそ

こからじゃ

夕「橋を……」

初老「おじいちゃん、早う帰りたいのう」

タ「ああもう、橋？ んー、それって自分が渡れるような走ってことだよな？ 本当？ 想像力？ それってどんな力なの？ いや橋を掛けるって。んー、橋を掛ける。橋を掛ける。橋を…、やり方が……」

(そしてタ、考えるように、願うように、祈るように)

音楽。

タ、橋を掛けるように思考し続ける。

何も無い舞台空間、想像上の橋が、そこに…

再び、『私の世界』のタイトルが。

その後、『2019年19月』『2019年20月』と年月が続く。

人類創世、新しい歴史の始まり。

永遠に続くかと思われる年月の重なり。

映し出される街の風景。

そして、その中での人の営み。

・・・)

終わら、あゝはじりから、はじまる

長堀博士又

2009年11月3日脱稿

2020年4月25日改稿